

5) 一般病棟における精神分裂病患者の術前術後管理経験

畠山 悟・金子 一郎 (県立小出病院外科)
原 滋郎

最近7年間に全身麻酔下で手術を施行した分裂病患者は14例(緊急手術6例, 待期手術8例)でその術前・術後の管理上の問題点について検討した。

術後の精神的合併症は10例(71.4%)に認められ, そのうちカテーテル自己抜去は5例・延べ9件に認められた。その発生率は緊急手術群に多く, 術前の意思疎通の可否とは無関係であった。向精神薬は術直前まで経口投与した方が合併症が少なかった。

合併症予防対策としての薬物療法はあまり有効ではなく, 四肢・体幹の抑制が効果的であった。

術前・術後の精神的な病状を適切に把握し, 精神科医の協力を得て注意深く対処すれば一般患者と同様の適応で, かつ一般病棟で十分手術・管理可能だと考えられる。

6) 興味あるイレウスの1例

磯部 茂・佐藤 滋美(公立森町病院外科)
藤井 了 (同 内科)

画像診断で回腸ポリープによる腸重積を原因とする閉塞性イレウスを疑い, 開腹術により食餌性イレウスであった興味ある1例を経験したので報告する。症例は75歳女性, 突然の間欠的腹痛, 嘔吐, 受診時腹部単純で小腸鏡画像を認め緊急入院となった。入院後イレウス管挿入, 腸管の減圧をしつつ小腸造影, 腹部CTを施行した。この結果, 血液学的変化は無かったが, 腹部症状の改善が認められなかったため, 上記を疑い, 入院5日目に開腹術を行なった。イレウスの原因は回腸上部での「シタケ」のかんとんであった。本症例は, 食物が異物として回腸ポリープの如く腸重積の先進部となったものであるが, その診断においては画像診断が有用であったと思われる。

7) 大腸の多発穿孔により発見された腸型ペーチェット病の1例

島村 公年・村上 富吉(西荻中央病院外科)
小山俊太郎・畠山 勝義(新潟大学第一外科)

症例は21歳, 男性。感冒様症状に続く右側腹部痛を主訴に当科受診。急性虫垂炎を疑い手術を施行したが虫垂

に異常はなく, 上行結腸(圧痛点と一致した部位)に潰瘍性変化を認めたためこれを局所切除した。第3病日より腹膜炎症状出現し, 第4病日緊急手術施行。大腸に計9カ所の穿孔を認め, 回盲部～下行結腸脾彎曲部切除, S状結腸部分切除および回腸下行結腸吻合, S状結腸直腸吻合を行った。切除標本では結腸全体にUI-IIからUI-IV(穿孔)の類円形下掘れ潰瘍を多数認めたが, 回盲部には病変は認められなかった。手術後より陰部潰瘍, 体幹の毛嚢炎様皮疹が出現し, また, 口腔内アフタの既往があることにより, 眼症状を除く不全型ペーチェット病の非定型的腸病変と診断された。

8) 当院における最近3年間のヘルニア症例の検討

田中 修二・阿部 僚一
榊原 清・松原 要一(県立吉田病院外科)

平成4年から平成6年11月まで当院ではそけいヘルニア239例(小児93例, 成人146例), 大腿ヘルニア30例, 閉鎖孔ヘルニア4例に根治手術を施行した。

平成6年6月からそけいヘルニア14例, 大腿ヘルニア2例の成人例に経腹膜到達法による腹腔鏡下手術を施行した。特に老人でヘルニア門の大きい症例, 再発例, 両側例, 直接型そけいヘルニア例, 対側のヘルニア手術の既往を有する例は良い適応と思われた。

今後, 成人のそけいヘルニア, 大腿ヘルニア例には第一選択として経腹膜または腹膜外到達法による腹腔鏡下手術を行う方針である。

9) 当科における腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術の検討

川合 千尋・川上 一岳
鈴木 聡・藤田みちよ(日本歯科大学)
吉田 奎介(新潟歯学部外科)

腹腔鏡下鼠径ヘルニア修復術(LH)は, 従来の外科手術に比べ, 美容上の利点のほか, 後壁補強による疼痛が少なく早期に社会復帰できる利点がある。当科では1992年5月よりLHを開始し, 現在までに18例に施行し順調な経過が得られているので報告する。

術式は, trans-abdominal preperitoneal mesh repairとしている。当初 mesh は下腹壁血管の下を通したが, 現在は上に被せている。施行症例は男13例, 女5例, 両側5例, 片側13例。1例で腹腔内癒着のため従来の術式